

平成25年度 東京国体観戦記

文責 東京都高体連強化委員長 小林 隆雄

54年ぶりに東京都で行われる国体が味の素スタジアムで行われました。45年ぶりの天皇杯獲得を目指し「TEAM TOKYO」の戦いぶりを記録しました。選手・スタッフの様子が伝われば幸いです。

10月2日（火）

スタッフは10時に集合し、台風の影響から雨の降るなかテントの設営を行った。雨が上がり始めたお昼ごろからは各都道府県のスタッフたちが同じように、選手たちの過ごしやすように工夫しながらテントを作成し始めた。午後になると選手たちが補助競技場となる「西競技場」で調整に励んでいる姿が目立つようになった。午後4時ごろには味の素スタジアムに虹がかかり、いよいよ始まろうとする「東京国体」に色を添えていた。

この日東京都選手は各々で調整するはずであったが、澤田イレーネが西競技場に現れ練習を行った。

テント設営や荷物の搬入を終え3時過ぎには宿舎である京王プラザホテルに移動。澤田の練習を見届けた後、5時過ぎに小林は帰宿。18：30より夕食、20：00よりミーティングを行い翌日に備えた。

宿舎は京王プラザホテルと調布のクレストンホテルに分かれて宿泊した。

10月3日（水）

終日快晴のなか前日の調整練習が行われた。昨日と同様メイン競技場である味の素スタジアムではサッカー競技が行われていたため陸上競技の選手は西競技場か代々木競技場が練習会場となった。

東京都選手団は、9時ころから集合し概ね午前中に調整練習を行った。終了した者から昼食をとり宿舎へ帰った。

男女監督の下山・小林は2時から始まる監督会議出席のため、調布市たづくり会館へ向かった。

監督会議では、選手変更リスト等の資料やナンバーカードの配布と議事が進行されたが、競技場への導線や競技運営についていくつかの質疑応答が行われたほか、宿舎における食事が貧粗であることなど「苦情」が寄せられ運営側がその返答に苦慮していた。

18：30から夕食をとり、20：00よりミーティングを行い、翌日に控えた「初日」の行動予定並びに決意表明・注意事項・監督会議での報告をした。

10月4日（金）大会初日

いよいよ「スポーツ祭 東京 2013」「東京国体」陸上競技の始まりである。

東京都選手団はこの日、予選・決勝を含めは9種目に出場した。

今大会最初の決勝種目である少年男子共通円盤投が10：00に始まり東京国体の幕が切って落とされた。

チームの「良い流れ」を作るには、最初の種目での健闘は最重要視される。そんな重圧の中出場した安藤 夢（東京2）は、1投目に自己記録に迫る48m45をマークしてトップに立ち試合を優位にするとともに、入賞を確実とする幸先のいいスタートを切った。途中ファールながら首位に立てる投擲を見せたものの、結局1投目の記録で2位としてチームに勢いを与えたのは大きな功績であった。

続く10：20からの少年女子B走幅跳に出場した高橋 このか（白梅学園1）は2回目に5m65を跳び5番目の記録でトップ8に進んだ。迎えた5回目に5m72の自己タイ記録をマークしたが順位は変わらず5位とし、安藤に続いての入賞で流れが更に良くなっていった。

トラックでは、10：30から少年女子A100m予選が行われていたが、2組に出場した高森 真帆（東京3）は向い風1.7mの中12秒16で1着となり「好調さ」を感じさせた。続く11：10からの少年男子A100mでは、予選2組に出場した林 謙太郎（八王子3）が好スタートから10秒70で2着に入り高森と共に準決勝へと駒を進めた。

11：50からは800mへと種目が変わり、少年男子共通800mに大分インターハイ3位の戸澤 文也（城西大城西3）が予選2組に出場した。スタートからレースを冷静に進め、終盤しっかりと先頭争いをしたが3番

目の選手ともつれながらのゴールで「ひやひや」したが、無事に2着（1分53秒03）となり翌日の決勝へ進んだ。女子ではインターハイ6位の卜部 蘭（白梅学園3）が予選2組に出場。こちらも百戦錬磨の経験からしっかりと1着（2分9秒24）で通過した。そのレースぶりは安心感があり余裕すら感じた。

13:00からは成年女子400mHの予選が始まった。先の日本インカレで2位となり好調を維持していた西野 愛梨（東京学芸大学4）はレース終盤をしっかりとめ、余裕を持った走りで58秒81をマークし1着とした。成年男子400mHでは宮尾 幸太郎（日本大学4）が強豪ひしめく厳しい予選1組に出場した。予選2組3着+2であったが、宮尾はレース前にはプラスでの決勝進出が予想されていた。しかし、西野同様終盤しっかりと粘り、堂々の3着での予選通過を果たした。タイムも50秒13のシーズンベストであった。

ここまで東京都チームはすべてが予想を上回る好調な結果で、「今年の東京は強いな」という声が聞こえ始めていた。少年男女の100m準決勝が14:05から女子、14:20から男子が行われた。高森も林も「ここが正念場」のレースとなったが、高森は12秒06で3着、林が10秒64の自己タイで3着とし、共に決勝に進んだ。この日好調の両者はゴール後には満面の笑顔で声援に応えていた。

フィールドでは、猿山 力也（モンテローザ）出場の成年男子走幅跳が14:00から始まっていた。東京都から5年連続で出場し昨年までキャプテンも務めたチームリーダーの活躍が期待されていた。去年は故障で満足な結果ではなかっただけに「リベンジ」を期しての出場であった。しかし、助走のスピードに踏切のタイミングが合わず、本来のジャンプが影をひそめ7m38でトップ8に進むことができなかった。ランキングがトップであっただけにスタッフには動揺が隠せなかった。

しかし、今年の東京都チームは例年とは違っていた。直後の少年100mで女子の高森が8位に、男子の林が5位に入り入賞が厳しい種目である100mでの得点は貴重であった。この両者の活躍で流れを引き戻して初日を終えた。この日東京都選手が出場した決勝種目5種目中4種目で入賞者を出し、総合9位でのスタートとなった。この夜のミーティングでは「先頭打者」として流れを作った安藤の功績が称えられた。明日に続く選手に大きな勇気を与えたことだろう。

10月5日（土）大会2日目

朝から冷たい雨が降り続く一日となったが、東京都チームは「大爆発」の活躍の一日であった。

この日最初の決勝種目は、10:10に少年女子共通砲丸投で大分インターハイ優勝者 長沼 瞳（郁文館3）の登場である。アップでの投げも好調で安心してピットに送り出せた。しかし、地元でありインターハイ・チャンピオンというプレッシャーからか1投・2投とファールを繰り返しピンチを迎えてしまった。だが、さすがに実力者、落ち着いて投じた3投目はトップに立つ13m23。トップ8に入ってから5投目に13m81を投げ優勝を決定づけた。東京都チーム最初の優勝に前日の流れが再び動き出し、この日の大量得点の口火を切った。トラックでは、10:00から少年女子B200m予選2組にエドバー・イヨバ（東京1）が出場した。冷たい雨、しかも朝一番というコンディションであったが、25秒05の自己タイ記録でゴールした。続く10:35からは少年男子B200m予選1組に優勝候補筆頭の大嶋 健太（東京1）が登場した。決勝までのイメージができるからか予選では本来の力を出す前にゴールしたが、22秒18のタイムでもトップ通過であった。共に準決勝へ駒を進めるとともに決勝での好記録に期待が膨らんだ。

続いて成年の100mが、11:10より女子から始まった。日本インカレ2位の藤森 安奈（青山学院大学1）が予選2組を走り抜け11秒81の好タイムでトップ通過した。男子には全日本実業団優勝の川面 聡太（ミズノ）が予選3組に登場。文句なしの1着、10秒51で藤森と共に準決勝に進んだ。

12:10からは成年男子800mに日本記録保持者の横田 真人（富士通）が出場したが、スタッフが招集時間を間違えて伝えていて、危うく「コール漏れ」を招くところであった。少々準備不足ではあったが、そこはベテラン。動じることもなく難なく予選を1分50秒80の2着ながら翌日の決勝へと進んだ。しかし、レース前に左足首を負傷し不安を残していた。

栄賞授与式を終え、午後からは少年女子B200mの準決勝から競技が再開した。1組5レーンを走ったエドバ

ーは自身初となる24秒台をマークする24秒89で1着通過をした。なかなか破ることができなかった25秒の壁を破ったエドバーには笑顔が弾けていた。男子の準決勝1組に登場した大嶋は、いよいよ本領を発揮し21秒54で他を寄せ付けず1着でのゴールには余裕を感じさせた。

藤森・川面の成年100m準決勝では、藤森が11秒86（-1.3）で、川面が10秒37（-1.9）で共に向かい風の中1着でゴールし決勝へ順当なる進出を遂げた。

フィールドでは14:10から少年男子A走幅跳がバック側ピットで始まり、井関 慶人（東京2）が出場した。7日の三段跳をメインにしていたためか踏切が合わず、本来のジャンプができずに終わった。

15:25からは少年女子共通800mの決勝にト部 蘭が出場した。前日の予選では余裕を持っていたが、さすがに決勝では緊張の面持ちでのスタートであった。レースでは本来の積極的な走りで終始先頭を引っ張りラストのコーナーを出たが、終盤やや力尽き2分09秒42で5位とした。ト部は中学3年生から4年連続しての国体入賞という大舞台で力を発揮できる強さを証明した快挙もであった。少年男子800m決勝に出場した戸澤文也は、予選とは違い自身のペースでレースを展開しト部同様先頭を争う位置を走っていたが、ラスト150m地点で左ハムストリングに肉離れを起こしペースを落としてしまった。しかし、それでも最後までレースを投げずに必死にゴールまで駆け抜け7位とした。ゴール後は歩くこともままならず、立ち上がることも辛そうな姿に「1点でも多く貢献したい」と最後まで諦めずに走った気持ちが強く伝わった。

15:55からは成年女子400mHが相変わらず降り続く雨の中スタートした。西野は自分の走りに終始徹底しラストの直線で前をいく選手を抜き去り3位でゴールした。今季安定した結果を残している西野にとっては日本代表を含めた全日本大会3位は立派である。成年男子の宮尾 幸太郎は自身のセカンドベストの50秒10で4位とした。宮尾は今シーズン、自分で納得するレースができておらず、今国体でも不安を持っていたが、その集中力と積極性から上位入賞を勝ち取った。その姿勢は少年に出場していた高校生たちの良き模範となっていた。以後宮尾は試合の終わった者たちを率先して応援に回り声を囁かしていた。

16:20には少年女子B200にエドバーが6レーンに出場した。冷たい雨の中ではあったが、好調のエドバーには心配不要であった。スタートはやや遅れたが、得意の終盤の加速で先頭に急迫し、わずかに遅れたがゴール後倒れるほどのフィニッシュで3着とした。記録も24秒60と再び自己記録を更新した。大きな目をさらに丸くしての喜びにその気持ちが表れていた。16:30からは男子200mに大嶋 健太が7レーンに立った。この日、中体連の「大応援団」が大挙して地元・東京チームに統率された声援が送られていたが、まさにそのボルテージは最高潮に達し、そんな大声援の中スタートした。大嶋のスタートは今や日本でもトップクラスだが、コーナー途中で優勝を確信できるほどのスピードで直線に入り、ゴールでは2位以下に大差をつける21秒25の大会新記録でゴールを駆け抜けた。高校1年生歴代4位の相当する自己新記録に大嶋は歓喜に包まれた。この大会での優勝を今年一番の目標としていただけにその嬉しさは格別であったことだろう。

続く成年100mでも大応援団が沸き上がった。女子の藤森は日本記録保持者・福島 千里選手に肉薄し3着でゴールし、日本代表選手の実力を示した。男子の川面も得意のスタートからすぐに先頭に立ち、終盤減速することなく1位でゴールし、東京都のこの日3種目目の優勝を飾った。いずれも東京都に貢献したいとの強い意志を示す走りであった。

大会2日目の東京都チームは、3種目に優勝した他6種目に入賞し、この日だけで53点もの大量得点を獲得する「大爆発」であった。まさに「東京 強し」の絶好調の1日であった。

夜のミーティングに車いすで参加した戸澤 文也には大村総監督から「特別賞」が授与されたと共に、明日から出場する選手に「勇気」と「負けん気」が伝わっていた。

また、中体連の応援への感謝の言葉が出場した全員から聞かれた。明日も・・・

夕食後のミーティングも「好調さ」を物語る「威勢のよさ」を感じた。しかし、10時を過ぎたころに「緊急事態」が・・・前日100mで入賞した林 謙太郎がトレーナールームで嘔吐と腹痛を訴えトイレで倒れこむ事態が起こった。ホテル側の警備と相談のうえ救急車を呼ぶことになり、男子監督の小林と共に代々木にあるJR東

京総合病院に搬送された。診察の結果、「急性胃腸炎」と診断される。おそらく極度の緊張と疲労からのものと思われ、ドーピング検査の事も考慮するよう医師に伝え、整腸薬を処方してもらうことに留めて回復を待ち帰宿。日付は翌日へと変わっていた。トレーナーはじめスタッフの迅速な対応に事なきを得た。

このことから、「何が起こるかわからない」との緊張感が、好調な結果にも「気を引き締める」ようスタッフに伝達された。

また、この日の栄賞授与では高校優秀指導者賞に小林、中学優秀指導者賞に下山の奇しくも男女監督を務める両者が受賞した。皆様！お気遣いいただきありがとうございます。（ゆりーとのぬいぐるみを頂戴しました）

10月6日（日）大会3日目

前日の大活躍の余韻を感じながら、総合トップで3日目が始まった。雨も上がり曇り空の朝から午後には晴れ間ものぞく好コンディションとなっていた。中体連の大応援団も前日の「倍以上」の数になり、さらに盛大な応援が期待できた。実に「心強い」状況である。引率の先生方を含め「感謝」の一言である。

この日のトップバッターには、10:00から少年女子B100mYHに地元・調布市在住の澤田 イレーネ（都文京1）が登場した。昨年、全国中学記録を樹立している澤田は、当然のことながら1着でゴールした。タイムは14秒11と朝一番としては「まあまあ」の走りであった。澤田は前夜のミーティングで、前年の岐阜国体に選手として出場が決まっていたが、直前の負傷のため棄権せざるを得なかったため、今年は「倍返し」することを誓っていた。2年分の思いを込めての出場であった。

10:10からフィールドでは成年女子三段跳がバックスタンド側のピットで始まった。日本インカレで2位とした岡野 菜穂子（東京女子体育大学4）が出場したが、3本とも自分の跳躍ができず12m45でトップ8に進むことができずに終わった。入賞が確実と予想されていただけに加点できなかったことは残念であった。

11:00からは少年女子400m予選が始まった。この種目でインターハイにも出場していない伊藤 明子（田園調布学園3）を選考したことは、これまでの国体選考では異例の事だろう。しかし、400mHでインターハイに優勝した走りから想定すれば、この選手起用は当然の事であった。事実、予選3組2着+2と厳しいなか伊藤は、持ち前の力強い走りで「なんと」53秒83という東京都高校新記録で2着となり決勝に進出した。これまでの都記録が54秒65であったことから、この記録がどれだけ偉大なものであるかは明白だ。高校歴代9位に相当する好記録にテントは沸き上がった。これで、伊藤は3種目目の東京都高校記録保持者となった。

11:50からは成年女子400m予選に前日の400mHで3位とした西野 愛梨が2種目目として出場した。直前の伊藤の好記録に負けじと健闘したが、56秒49で予選6着となり決勝進出はならなかった。

12:35には少年女子B100mH準決勝が始まった。2組に出場した澤田は13秒89と予選からタイムアップして2着で決勝へと進出した。スタートからスムーズに加速してリズムに乗ったハードリングは澤田らしくて期待が持てた。準決勝から約1時間半後の14:15からの決勝では、抜群のスタートから飛び出した澤田がトップでハードルを越えていった。しかし、7台目を越えたあたりで静岡県藤森選手に並ばれ自分のリズムを崩し3着でゴールした。13秒85と準決勝から更にタイムを上げてただけに優勝を逃したのは残念であったが、地元の大応援を受けてのレースに場内はさらに盛り上がりを見せていた。

この間、13:30からはフィールドで少年男子A砲丸投が行われていた。初日の円盤投で2位とした安藤 夢が2種目目の出場とした。練習投擲から大声援を受けて気持ちが高まっていた安藤は、1投目に自己記録を上回る16m22を投げいきなりトップに立つ好スタートを切った。2投目にも16m44とこれまでの自己記録を40cm更新し好調を呈した。3位でトップエイトに進んだが最終的には4位とした。しかし、自己記録を3本も上回り、2種目で入賞し合計12点も獲得した健闘は素晴らしい活躍であった。

また、13:50からは成年男子走高跳が行われ、この国体で「一線を退く」と明言していた醍醐 直幸（ニューモード）が「ラストジャンプ」に挑んだ。2m03から始めたが、そのジャンプで痙攣を起こしパスをして回復に努めたが2m15を超えることができずその競技を終了した。多くの声援の中、競技生活を終えることになったが、この日のために最大限の努力をし好調で迎えられていただけに残念な結果となった。

14:15から成年女子800mに開会式で選手宣誓を行った須永 千尋（資生堂）が出場した。全日本実業団で優勝しており好調であったが、地元開催のプレッシャーからかレースに積極性がみられず、ラストの追い上げで3位になるのが精一杯であった。

続く男子800m決勝に登場した横田 真人は前日に痛めた足首の状態が思わしくなく、須永同様自身の思い通りの走りには程遠かった。そんな状況でもレースを捨てることなく最後まで必死に走り抜き4位を死守した。少年たちの頑張りに成年が応えようと「プライド」を捨て必死に競技している姿が皆に勇気を与えていた。

この日からリレーが始まった。男女とも優勝を目標にチーム作りをしてきただけに順調に決勝まで進んでもらいたい。そんな気持ちで予選を見守った。15:45から女子の予選が始まったが、坂内 睦（東京女子体育大学AC）・藤森 安奈・高森 真帆・エドバー・イヨバのオーダーで臨んだ東京都女子チームは45秒27で全体のトップタイムの1着で通過した。続く男子は39秒41の大会新記録を樹立しての予選通過とした。そのオーダーは女部田 亮（中大4）・川面 聡太・林 謙太郎・大嶋 健太である。前夜、救急搬送された林は何事なかったかのように快走し「安心」させてくれた。男女共に安全なバトンパスを徹底してのこのタイムは準決勝以降に期待が膨らんだ。

この日を終えて、すでに総合得点は目標に近づく100点を越えて総合トップとした。

また、前日負傷した戸澤は「自立歩行」できるまでに回復していた。

この夜は、前日と違い「何事もなく」平穏に過ぎていった。

10月7日（月）大会4日目

天皇杯・皇后杯争いが注目され始めたこの日が始まる時点での総合争いは、東京都がトップ。されど、静岡県・京都府・埼玉県の猛追を受け僅差での争いとなっていた。どこが優勝してもおかしくない状況となっていた。事実、この日は一種目終わるたびに首位が入れ替わる状況であった。

この日の東京都の最初の種目は、10:10からの少年男子共通三段跳であった。出場した井関 慶人（東京2）は入賞が厳しい状況ではあったが、思い切った跳躍をした。残念ながら試技のすべてをファールとし「記録なし」で競技を終えたが、走幅跳とともに入賞することができず反省ばかりが残る結果となった。

トラックでは、10:25から成年男子110mH予選が始まり、東京都からはキャプテンの八幡 賢司（モンテローザ）が満を持して出場した。3組4レーンに立った八幡は、「肉離れ」をして連覇を逃した日本選手権と同じ4レーンという事に緊張感を高めていた。しかし、スタートから7歩で1台目を越える取り組みから安定して加速でき、中盤から先頭争いをしながら2着、13秒95でゴールした。八幡もここ数年国体で貢献できなかったことから、今国体に賭ける意欲は大きく「今年一番」の走りを公言していた。

11:20からは成年女子10000mWがスタートした。全日本実業団で2位とし自己記録を更新中の好調を維持しての出場となった道口 愛（コメディ・イイダ）に優勝の期待がかかった。しかし、昨年の国体で「失格」していた彼女は慎重にレースを進めざるを得なかった。先頭を争うことはできなかったが常に3位以内でレースを進め、警告を3枚受けることなく最後まで歩きぬくことができ、2位という最良の結果を得た。本人は納得できない表情ではあったが「7点」という貴重な加点を得て東京都は優位になった。続く12:40からは少年男子5000mWが始まった。大分インターハイに入賞し、今大会のランキングもトップの記録を持ち出場した山口 壱平（東京実業3）にも期待が大きくかかっていた。それもそのはずで、天皇杯争いをしていた静岡県は競歩競技には選手を出場させていなかった。成年女子と合わせて競歩への期待は大きかったのである。山口は序盤から先頭を伺える位置を常にキープし上手にレースを進めていた。後半に差し掛かって集団がばらけてもその位置を常に維持していた。ラストの直線でも懸命に、顔を歪めながら必死にゴールに向かった。自己記録を上回る20分40秒台で4位のゴールに歓声が上がったが、ゴール後の正式発表ではロス・オブ・コンタクトの警告を3回受けての「失格」となった。本人はもちろんであるが東京都全体にとっても誠に残念な結果であった。

13:10からは伊藤 明子が出場する少年女子400m決勝が行われた。予選で53秒台の好記録をマークした伊藤は4レーンに登場した。序盤は抑え気味な走りであったが、ラストに貯めていた力を一気に爆発させ先を

行く選手を抜き去り4位でのゴールとなった。しかし、その疲労は大きく、ゴール直後には倒れこみ、車椅子で医務室に運ばれるほどであった。しかし、伊藤には倒れている「ひま」などはなかったのである。その時にはすでに「次の種目」である成年少年共通女子走高跳の練習跳躍が行われていたのである。だが、東京都チームのスタッフもこの事態を想定しており、奥トレーナーのケアののち伊藤はピットに向かった。

しかし、その間に行われた少年男女の400mは両種目とも静岡県が優勝し、天皇杯は逆転をされてしまったのである。また、ハンマー投げの埼玉県勢の活躍で猛追を受けてもいたのである

14:25からは成年男子110mHが行われた。静岡県に流れ始めた「いい流れ」を引き戻したのは、キャプテン八幡の「意地」の走りであった。スタート前には非常に緊張した面持ちで、他を寄せ付けない雰囲気さえ感じさせていた。スタートも「まずまず」で、得意の中盤から抜け出し、ゴール直前の混戦には上半身をしっかり突き出してフィニッシュを決め3位とした。八幡の気持ちが伝わったのか、この後「TEAM TOKYO」は再び「入賞ラッシュ」となったのである。

13:30から始まっていた少年男子B走幅跳で中村 健士（都調布北1）が3回目に7m20の自己ベストを跳躍し2位となっていた。地元・調布という事もあり自校の仲間たちの声援を受け「伸び伸び」と跳躍している姿は頼もしさすら感じた。中村の2位で静岡県を再度逆転し総合争いトップに返り咲いたのである。更に、走高跳では伊藤が健闘していた。1m66から跳び始め1m72までを全て1回目に成功していたのである。この時点で5名が残っており1m75にバーが上がった。伊藤は3回目に誠に「惜しい」跳躍であったが3回とも失敗し競技を終えた。それまでを全て1回目に成功していたおかげで「試技差」で3位を単独で確定し「6点」を獲得した。この日の決勝すべてを終え、その「6点差」で総合首位を保っていたのである。1日に、それも短時間のスケジュールの中で2種目に健闘した伊藤の活躍は、まさに「救世主」であった。

その後、14:45から少年男子B3000m予選が行われた。スピードランナーの齋藤 雅英（早稲田実業1）は終盤まで真ん中あたりに位置し、得意のラストスパートで2着となり、翌最終日の決勝へ駒を進めた。

15:45からは女子リレーの準決勝が行われた。2組目に予選と同じオーダーで出場したが、バトンパスの歩測も伸ばしたとのことだが、記録は45秒26に留まった。次の3組目に走った岩手県チームが44秒台の大会新記録をマークしたのに次いで2番目のタイムで決勝進出を決めた。続いた男子は、女子同様予選と同じオーダーで39秒16の予選を上回る大会新記録で、かつ他を大きく引き離す全体のトップタイムで最終種目の決勝へと駒を進め4日目の競技を終了した。

天皇杯・皇后杯争いで、1種目ごとに順位が入れ替わる「緊張した」大会4日目であったが、結果的には天皇杯で6点差をつけて東京都がトップで最終日を迎えることとなった。

ミーティングでは、これまでの健闘を互いに称えるとともに「最後まで全員で戦おう」と選手・スタッフ・そして競技を終えた応援組とで意志統一を確認し最後の夜を迎えた。

10月8日（火）大会最終日

この日は、閉会式があることから9:20と早い時間からの少年男子B3000mが最初の種目となった。前日の予選で自分のレースができた齋藤はスタートからいいポジションを維持し「虎視眈々」とスパートに備えていた。ラスト1周となり徐々に先頭を伺い、直線に入った時に最高速に達した齋藤は他を寄せ付けることなく先頭でゴールラインを駆け抜けた。自身の持ち味をしっかりと出しての東京都4種目目の優勝は「見事」の一言であり、総合優勝を決定づける「快勝」であった。

9:40からは少年女子共通3000m決勝がスタートした。昨年の国体でスタート直後に転倒した谷萩 史歩（八王子3）は「リベンジ」を期していた。スタートから飛び出した青森県の留学生ランナーがハイペースで飛ばすが、谷萩も積極的にそれを追った。終盤まで自分のペースで走り切り、自己記録である東京都高校記録に迫る9分15秒89で9位とした。残念ながら入賞は逃したがリレーに勢いをもたらす好走であった。この悔しさは駅伝で晴らしてもらいたい。

いよいよ、最終種目となる男女のリレー決勝である。齋藤の優勝がありながら、総合争いの対象である静岡県も

男女とも決勝に残っていることから11点差をつけてトップでありながら「優勝決定」には至っていなかった。女子決勝に臨む東京都チームは、予選から不動のオーダーである、坂内・藤森・高森・エドバーである。スタートが得意な坂内は他を引き離し先頭で藤森にバトンを渡した。やや流れたバトンパスであったが藤森の加速で2位を引き離し高森に。岩手県の追い上げから2番目でエドバーにバトンが渡った。エドバーは必死にゴールを目指したが岩手県に追いつくことはできなかったが、北海道のアンカー・福島 千里の追い上げをかわし2着でゴールし、天皇杯と皇后杯（すなわち総合優勝）が決まった瞬間でもあった。2位という事ではあったが東京都新記録での準優勝は立派であった。晴れやかな笑顔での表彰式は清々しく、やり遂げた充実感が伝わった。

東京国体の最後の種目となった男子リレーは予選・準決勝と大会記録を更新し、タイム的にも他府県を0.5秒以上も引き離していた。男子リレーの優勝で総合優勝に花を添えたいところであった。スタートでは女部田が外側の選手をいとも簡単に抜き去りダントツトップで2走川面へバトンを渡すところであったが、女部田が川面に追いつかずオーバーゾーンで「失格」となってしまった。まことに残念な結果ではあったが、全ての競技を終え「大願成就」を果たした「TEAM TOKYO」のメンバーたちには「達成感」が溢れていた。

その面々を前にして大村総監督は涙を堪えることはできなかった。スタッフみんなも涙にくれた。「歓喜」を分かち合えた喜びはこの上ないものであった。

ちなみに、総合優勝記念Tシャツはミズノ社が密かに準備してしてくれた。

編集後記

昨年の岐阜国体では、地元・岐阜県が天皇杯を勝ち得た。

地元とはそんなにも有利なのだろうか？と考えさせられた1年間であった。地方開催の国体では、教員卒や就職のあっせんを利用して「有力選手」の獲得を実施している。しかし、東京都は「その必要は無し」とのことで東京都出身の大学生を中心に戦力を整えるように。とのことだった。更にメイン競技場である味の素スタジアムでの競技会も、前年度の東京選手権と今年6月の日本選手権のみであった。事実、少年の選手たちの殆どが「初めての味の素スタジアム」であった。慣れ親しんだ競技場ではない不便さは他県選手と同様であった。

なんら有利なところはなかったと感じるが「勝ってしまった」。

これは一重に、必勝委員会の先生方の情熱と結束と知恵と努力とチームワークの良さからだと思えない。

そして、選手諸君の必死さと頑張りが際立った結果だ。

高体連強化委員長と言う立場にしながら、どんな強化策が効力を発揮できたかは定かではない。しかし、中体連で育てた原石がスムーズに高校で活躍できたこと。また、東京の高校を出て大学生・社会人となり活躍できた選手が多かったこと。すなわち、年代の隔たりなく連携の良さが今回の偉業達成の要因であったのではないだろうか？「東京国体」の今年に、こんなにも素晴らしい選手達でチームを編成できたことが優勝できた一番の原因だったということだろう。この選手達とスタッフで東京国体を戦えたことを誇りにし、その選手達に関わってきた全ての方々に感謝をして文を閉じたいと思います。

45年ぶり9回目の天皇杯・皇后杯を受け取ることができたことに改めて感謝と喜びをお伝えいたします。